

テーマ	学習者の「学びデザイン力」を育む教師の役割—国語科の授業実践をもとに考える—
発表者 (所属)	企 画 者:小野絵美(長野県公立小学校) 司 会 者:山田秀人(昭和学院小学校) 話 題 提 供 者:國嶋朝生(北海道公立小学校) 溝越勇太(筑波大学附属小学校) 藤井篤徳(長野県教育委員会・元長野県公立中学校) 指 定 討 論 者:石原厚志(東京都公立小学校) 上月康弘(松本大学)

【発表概要】

《企画趣旨》

文部科学省(2021)の答申「令和の日本型教育」(答申)では、「個別最適な学び」の実現に向けて、子供が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整することができるように促していくことの重要性を強調している。⁽¹⁾この学習者が、「主体的に学習を調整する力」、すなわち、自ら学びに目標を持ち、方法を考え、実践し、振り返りながら次へとつなげていく力を、本シンポジウムでは『学びデザイン力』とする。この『学びデザイン力』は、「個別最適な学び」の実現に不可欠な資質・能力であり、教育関係者から高い関心を集めている。この背景から、多くの教師が、学習者の『学びデザイン力』をいかに育むかに関心を抱いていることが推察される。そこで、本シンポジウムを通し、学習者の『学びデザイン力』を育む教師の役割とは何かを問い、その具体化を図る。

本シンポジウムでは、国語科の授業事例を通して、学習者の『学びデザイン力』を育む教師の役割について言語化を目指したい。まず、日頃から UDL 実践をしている國嶋先生に、学習者エージェンシーの捉えも含めて話題を提供していただく。次に、サービ斯拉ーニングの考えをもとに協働的な学びでも実践をされている溝越先生に教師の役割についての考えを含め話題を提供していただく。最後に、中学生と多様な学習形態で国語授業を実践されている藤井先生に話題を提供していただきたい。これまで、多様な子どもたちと授業をしてきたり、若手の先生と数々の授業づくりに励んでこられたりした山田先生に司会として進行していただく。

それぞれの実践には、相違点があるだろう。しかし、それぞれが考える教師の役割について時間の許す限り語り合うことで、共通項を見出し、明日からの国語授業で大切にすべき、学習者の『学びデザイン力』を育む教師の役割について明確に言語化することを目的としたい。

引用文献

- (1) 文部科学省、「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現～(答申)(中教審第228号)2025年7月30日閲覧

《話題提供》

北海道公立小学校 國嶋 朝生

「UDLの枠組みで、学習者エージェンシーを育てる教師の役割を考える」

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実が全国の学校で取り組まれている中で、特に注目を集め

ている学習環境デザインの枠組みが、学びのユニバーサルデザイン(UDL, Universal Design for Learning)だ⁽¹⁾。UDL は、アメリカの CAST が提唱するすべての学習者の学びを助けるための概念的フレームワークであり、最終的なゴールは、学びを舵取りできる「学習者エージェンシー (learner agency)」である⁽²⁾。筆者は、これまで UDL の枠組みによる授業改善を続け、自分で自分の学びを舵取ることの大切さと面白さ、を共有することを目指してきた。国語科においても、主に書くことや読むことに関する障壁を探し出しながら、試行錯誤を続けて実践している。その中で、教師である私に一番必要であったのは、問題を学習者の中ではなく、カリキュラムの側にあると捉え直すことであった。児童の得意・不得意は多様であり、融通の利かない全員一律な学習方法では、学べない・学びにくい児童が出てくるからである⁽³⁾。この捉え直しを続け、全ての学習者にとってアクセスしやすく、挑戦しがいのある学習環境を整えることこそが、教師の役割なのではないだろうか。当日は「初見の物語文や説明文を読んで理解する」「自分の考えを文章にする」などの具体的な学習場面をもとに話題提供し、学習者エージェンシーを育てる教師の役割について検討したい。

- (1) 川俣智路. “自分の学びを舵取ることができる学習者の育成”. 学びの場.com.2024-9, <https://www.manabinoba.com/research/023191.html>(参照 2025-7-30).
- (2) 名越斉子.竹前セルズ奈津子.バーンズ亀山静子.川俣智路.学習者エージェンシーを育む UDL ガイドライン 3.0.埼玉大学紀要 教育学部,2025, 74(1) ,p.171-182
- (3) 國嶋朝生.“多様な学び方を生かして「一人ひとりが最適に学ぶことのできる」教室へ” 学びの場.com.2024-9, <https://www.manabinoba.com/research/023190.html> (参照 2025-7-30).

≪話題提供≫

筑波大学附属小学校 溝越 勇太

「教室での学びを社会へつなぐー探究型国語授業のデザインー」

私の授業づくりの根幹には、サービスラーニングの考え方に基づいた「探究型国語授業」がある。これは、教室での国語の学びを、地域・社会の課題解決に生かす(地域貢献・社会参加)ことを通して、真に生きて働く言葉の力を育てることを目指すものだ。子どもたちが「今日の授業、何やるの?」「何のために勉強するの?」といった受け身の姿勢から脱し、自ら課題を見つけ解決しようとする「探究する子」になることを願っている。

本シンポジウムでは、その一例として『スイミー』の授業実践を紹介する。この授業では、作品を読んで感想を持つだけで終わらず、「スイミーかるた」や「オリジナル絵本」を創作し、最終的には「絵本で地域に貢献する」という社会とつながるゴールを設定した。このように、教室での学びが社会貢献へとつながっていく一連の「学びのストーリー」をデザインすることが、子どもたちの主体性を引き出す。

このような学びにおいて、教師の役割は知識を一方的に教えることではない。子どもたちが向き合うべき「答えのない問題」を含む状況や場を設定し、教室で得た知識や技能を社会のために「使う」経験をデザインすることである。教室の中だけで完結しない学びの機会を創り出すことこそ、学習者の『学びデザイン力』を育む上で重要な教師の役割だと考える。当日は、子どもたちが教室を飛び出し、言葉の力で社会と関わっていく姿を具体的に紹介する。

「生徒が主役になる国語教室づくり」

今年 4 月に現職となるまでの 25 年間は、長野県内中学校で教諭として勤務していた。その間、国語の授業をライフワークとし、常に生徒と共に私自身も「楽しい」と思える国語教室を目指してきた。その手法は、今から思えば、教科としての専門性を高めることに軸足があったように思う。それは「教師がいかにか教えるか」であり、「藤井先生の国語の授業はわかりやすい」という生徒の声を追い求めていた。しかし、ある時期から「生徒に教える」だけではなく「生徒が学ぶ」という視点で授業づくりをする必要性を感じるようになった。「深い学び」とか「アクティブラーニング」とかいう言葉が脚光を浴び始めた頃であったように思う。以後、個別最適、協働的、自由進度、探究など、その時々「いかにか学ぶか」という一つの視点として関心を寄せながら、「生徒がいかにか学ぶか」を追求する私の授業づくりは進むことになった。

本シンポジウムでは、文学的な文章・説明的な文章、古典作品など「読むこと」を中心にいくつかの授業実践を通して中学生が中学生らしく国語の学びに取り組む姿を紹介し、そこに至る教師の役割について私なりにお伝えしたい。私自身、今も授業観を揺さぶられるような日々を過ごしていることから、「その時点での」という言葉が付くもので一般化できるものでないが、この場でまた一步、学びを深めたいと思っている。